

飯坂ゆき

泉鏡花作

—

旅は此だから可い　——　陽氣も好と、私は熟と  
して立つて視て居た。

五月十三日の午後である。志した飯坂の温泉へ行  
くの、汽車で伊達驛で下りて、すぐに俵をたよ  
と、三臺、四臺、さあ五臺まではなかつたかも知れ  
ない。例の梶棒を横に見せて並んだ中から、毛むく  
じやらの親仁が、しよたれた半纏に似ないで、威勢  
よくひよいと出て、手繰るやうにバスケットを引取  
つてくれたは可いが、續いて乗掛けると、何處から  
繰出したか　——　まさか臍からではあるまい　——  
蛙の胞衣のやうな管をづるりと伸ばして、護謨輪  
に附着けたと思ふと、握拳で操つて、ぶツ／＼と風  
を入れる。ぶツ／＼　　しゆツ／＼と、一寸  
手間が取れる。

蹴込へ片足を掛けて待つて居たのでは、大に、い

や、少くとも湯治客の體面を損ふから、其處で、停車場の出口を柵の方へ開いて、悠然と待ったのである。

「ちよツ、馬鹿親仁」 と年紀の若い、娑婆氣らしい夥間の車夫が、後歩行をしながら、私の方へづくと寄つて来て、

「出番と見たら、ちゃんと拵ツて置くが可いだ。お客を待たいて、タイヤに空氣を入れるだあもの。

馬鹿親仁」 と散溢れた石炭屑を草鞋の腹でバラリと横に蹴つて、

「旦那、お待遠様づらえ」 何處だと思ふ、伊達の建場だ。組合の面にかゝはる、と言つた意氣が顯れる。此方で其の意氣の顯れる時分には、親仁は車の輪を覗くやうに踞込んで、髯だらけの唇を尖らして、管と一所に、口でも、しゅツ／＼息を吹くのだから面白い。

さて、若葉、青葉、雲いろ／＼の山々、雪を被いだ吾妻嶽吾妻嶽を見渡して、一路長く、然も凸凹、

ぐら／＼とする温泉の路を、此の親仁が挽か《くの  
だから、途中すがら面白い。

軽便鐵道の線路を蜿々と通した左右の田畑には、  
ほの白い日中の蛙が、こと／＼くつ／＼と忍笑かを  
するやうに鳴いた。

まだ、おもしろい事は、――停車場を肱下り  
に、ぐる／＼と挽出すと、間もなく、踏切を越さう  
として梶棒を控へて、目當の旅宿は、と聞くから、  
心積りの、明山閣と言ふのだと答へると、然うかね、  
此だ、と半纏の襟に、其の明山閣と染めたのを片手  
で叩いて、飯坂ぢやあ、いゝ宿だよと、正直を言つ  
たし。――後に、村一つ入口に樹の繁つた、白  
木の宮、――鎮守の杜を通つた。路傍に、七八  
臺荷車が、がた／＼と成つて下り居て、一つ一つ、  
眞白な俵詰の粉を堆く積んだのを見た時は

「磨砂だ、磨砂だ」 と氣競つて言つた。――  
「大層なものだね」

實際じつさい、遠とほく是これを望のぞんだ時ときは　ー　もう二三日にち、  
奥州あつしうの旅たびに馴なれて山やまの雪ゆきの珍めづしくない身みも、前途ゆくてに  
偶ふと土手どてを築ついて怪あやしい白氣はくきの伏勢ふせせいがあるやうに目  
を敬そはたてたのであつた。

荷車輓は、椿の下、石燈籠の陰に、ごろ／＼休んで居る。

「飯坂の前途の山からの、どん／＼出ますだで。  
 ー いゝ磨砂だの、これ」と、逞しい平手で、  
 ドンと叩くと、俵から其の白い粉が、ふツと立つ。

ぱツと、乗つて居るものゝ、目にも眉にもかゝるから、ト帽子を傾けながら、

「名ぶつかい」

「然うで、／＼、名ぶつで」と振り向いて、和笑としながら、平手で又敲いて、続けざまにドン／＼と俵を打つと、言ふにや及ぶ、眞白なのが、ぱつ／＼と立つ。ー 東京の埃の中で、此の御振舞を一口啖つては堪まらない。書肆へ前借に行く途中で、もあつて見たが可い、氣の弱い嫁が、松葉で燻されるくらゐに涙ぐみもしかねまい。が、たとへば薄青い樹の蔭の清らかなる境内を、左に、右には村の小

家へに添そつて、流ながれがさら／＼と畔くろを走はる。――  
社かきつばた若たが、持もちぬしの札ふたも立たたずに好すきなまゝ路みち傍ばたの其そ  
の細さいりう流りうに露つゆを滴したらして居ゐるのである。

親おやぢ仁たなそこの掌たなそこは陽かげろふ炎ひを掴つかんで、客きやくは霞かすみを吸すふやうであ  
つた。

雨あめも露つゆも紫むむじに、藍あゐに、絞しぼりに開ひらく頃ころは、嘸さそぞと思おも  
ふ。菖あやめ蒲あやめ、杜かきつばた若たは此こゝ處ちばかりではない、前ぜんじつ日じつ――  
前ぜん々ん日じつ一いつ見けんした、平ひら泉いづみにも、松まつ島しまにも、村むら里さとの小をが  
川は、家いへ々々の、背せ戸と、井い戸と端はた、野の中なかの池いけ、水みづある處ところに  
は、大おほ方かた此このゆかりの姿すがたのないのはなかつた。又また申まを  
合あはせあたやうに牡ぼ丹たんを植うてある。差さ覗しのく軒のき、行ゆきず  
りの垣かき根ね越こし、藏くらの廂ひあ合あひひまで、目めに着つけば皆みな花くわ壇たんがあ  
つて、中なかには忘わすれたやうな、植う棄すてたかと思おもふ、何なん  
の欲よくのないのさへ見みえて、嚴いづく静しづかな葉はは、派は手て  
に大おほ様やうなる紅こう白はくの輪わを、臺うてなを、白はく日じつに或あるは抱いだき或あるは  
捧さげて居ゐた。が、何なんとなく、人ひとよりも、空そらを行ゆく雲くも  
が、いろ／＼の影かげに成なつて、其その花はなを視ながめさうな、  
沈しづんだ寂さびしい趣おもむの添そつたのは、奥あう州しゅうの天てん地ちであらう。



猿が、  
蓑着て向ひの山へ花をりに行く童謡に、

一本折つては腰にさし、

二本折つては蓑にさし、

三枝、四枝に日が暮れて。

彼方の宿へ泊らうか。

此方の宿へ泊らうか。

彼方の宿は雨が漏る、

此方の宿は煤拂で

と唄ふ

あはれさ、心細さの、  
謠の心を

思ひ出す。

二階が、また二階が見える。黒い柱に、煤け行燈。  
 木賃御泊宿　――　内湯あり　――　と、雨ざらし  
 に成つたのを、恚う　見ると、今めかしき  
 事ながら、芭蕉が奥の細道に

五月朔日の事也。其夜、飯坂に宿る。温泉あれ  
 ば湯に入て宿かるに、土座に筵を敷いて、あやしき  
 貧家なり。

灯もなければ、ゐろりの火影に寢所を設けて  
 云々。　――　雨しきりに降て臥る上よりもり、

と言ふのと、三百有餘年を経て、あまり變りは無  
 さうである。

とニす顔を、突然、燕も蝙蝠も飛ばずに、柳のみ  
 どりがさらりと拂ふと、其の枝の中を搔潜るばかり、  
 しかも一段づいと高く、目が覺めるやうな廣い河原  
 を下に、眞蒼な流の上に、鋼鐵の欄干のついた釣橋

へ、ゆら／＼と成つて、スツと乗つた。

行燈部屋を密と忍んで、裏階子から、三階見霽の欄干へ駈上つたやうである。

しばらく、行燈部屋、裏階子、三階見霽の欄干と言ふのは、何の、何處の事だとお尋ねがあるかも知れない。

いや、實は私も知らん。――此は後で、飯坂の温泉で、おなじ浴槽に居た客同士が、こゝなる橋について話して居たのを、傍聞きしたのである。

唯見ると、渡過ぐる一方の岸は、目の下に深い溪河――即ち摺上川――の崖に臨んで、づらりと並んだ温泉の宿の幾軒々々、盡く皆其の裏ばかりが三階どころでない、五階七階に、座敷を重ね、欄干を積んで、縁側が縦に繞り、階子段が横に走る。

此の陽氣で、障子を開放した中には、毛氈も見え

れば、緞通も見える。屏風、繪屏風、衣桁、衝立  
―― お軽が下りさうな階子もある。手拭、浴衣  
を欄干に掛けたは、湯治場のお定まり。萌黄、淡紅  
しどけない夜の調度も部屋々々にあからさまで、下  
屋の端には、紅い切も翻々する。寝轉んだ男、柱に  
凭つた圓鬘姿、膳を運ぶ島田鬘が縁側を―― 恠  
う宙に釣下つたやうに通る。其の下の水  
際の岩窟の湯に、立つたり、坐つたり、手拭を綾に  
した男女の裸身があらはれたかと思ふと、横の窓か  
らは馬がのほりと顔を出す、厩であらう。山吹の花  
が石垣に咲いて、卯の花が影を映す。―― 宛如、  
秋の掛稻に、干菜、大根を掛けつらね、眞赤な蕃菽  
の束を交へた、飘逸にして鏘のある友禪を一面ずら  
りと張立てたやうでもあるし、しきりに一小間々々々  
に、徳利にお猪口、お魚に扇、手桶と云ふのまで結  
びつけた、小兒衆がお馴染の、當もの、臺紙で山を  
包んだ體もある。奇觀、妙觀と謂つべし。で、激流  
に打込んだ眞黒な杭を、下から突支棒にした高樓な  
ぞは、股引を倒に、輕業の大屋臺を、チヨンと木の  
頭で載せたやうで面白い。

湯野の温泉の一部である。

#### 四

飯坂と、此の温泉は、橋一つ隔てるのであるが、摺上川を中にして兩方から湯の宿の裏の、小部屋も座敷も、お互に見え合ふのが名所とも言ふべきである。と、後に聞いた。

時に　　今渡つた橋である　　私は土産に繪葉がきを貰つて、此の寫眞を視て、十綱橋とあるのを、喜多八以來の早合點で、十綱橋だと思つた。何故なら、かみ手は、然うして山が迫つて、流も青く暗いのに、橋を境に下流の一方は、忽ち豁然として磧が展けて、巖も石も獲ものゝ如くバツと飛ばして凄**い**ばかりに廣く成る。　　山も地平線上に遠霞んで、荒涼たる光景が恰も欄干で絞つて、網を十をばかり、ぱつと捌いて大きく投げて、末を廣げたのに譬たのだらう。と、狼狽へて居たのである。

念のために、訂すと、以ての外で。むかしは兩岸に巨木を立て、之に藤の綱十條を曳き、綱に板を渡したと言しき由緒があつて、いまでも古制に習つた、

鐵の釣橋だと言ふ

おまけに歌までである。

陸奥の十綱の橋に繰る綱の

絶えずもくるといはれたるかた 千載

集

旦那 ー ー あの藤の花、何うだ。

「はあ。」

「あれだ、見さつせえ、名所だにの。」

「あ、見事だたあ。」

私は俵から、崖の上へ乗出した。對岸 ー ー

橋を渡つて俵は湯の原の宿の裏を眞正面の坂を上

る ー ー に五層七層を連ねた中に、一所、棟と

棟との高い切目に、樅か櫻か、偉なる古木の青葉を

巻いて、其の梢から兩方の棟にかゝり、廂に漾ひ羽

目に靡いて、颯と水に落つる、幅二間ばかりの紫を、

高樓で堰き、欄干にしぶきを立たせて散つたも見え

る、藤の花たる瀧である。

私は繰返した。

「あゝ、見事だたあ。」

「旦那、あの藤での、むかし橋を架けたげだ。」

「落ちててもいい、渡りたいな。」

と言つたばかりで（考慮のたい恥しさは、此れを聞いた時も綱には心着かなかつた、勿論後の事で）

其の時は と言つたばかりで、偶と口を

つぐんだ。

馬の背のやうに乗上つた俚の上の目の前に、角柱の大門に、銅板の額を打つて、若葉町旭の廓と鑄てかゝげた、寂然とした、明るい場所を見たからである。

青磁、赤江、錦手の皿小鉢、角の瀬戸もの屋がきりりとする。横町には斜に突出して、芝居か・何ぞ、興行ものゝ淺葱の幟が重なつて、ひら／＼と煽つて居た。

ぐら／＼と、しかし、親仁は眞直に乗込んだ。

「廓くわくわがあすぞ、旦那だんな。」

屋號やがう、樓稱ろうしやう（川かは）と云いふ字じ、（松まつ）と云いふ字じ、藍あゐに、紺染こんぞめ、暖簾靜のれんじやうかに、（必かならず）と云いふ形かたちのやうに、結むすんでだらりと下げた蔭かげにも、覗のぞく島田鬻しまだは見えみえたんだ。

「ひつそりして居ゐるづらあがね。」

「あゝ。」

「夜よさは賑にぎかだ。」

出口でぐちの柳やなぎを振向ふりむいて見みると、間まもなく、俣くもは、御ご紳燈しんとうを軒のきに掛かけた、格子かうしづくりの家居いへの並ならんだ中なかを、常磐樹ときはぎの影透かげすいて、颯さつと紅べにを流ながしたやうた式臺しきだいへ着ついた。明山閣めいざんかくである。

「綺麗だなあ、此の花は？」  
 私は磨込んだ式臺に立つて、番頭と女中を左右に  
 したまゝ、うつかり訊いた。

「躑躅でござります」 と年配の番頭が言つた。

櫻か、海棠かと思ふ、巨なつゝじの、燃立つやう  
 なのを植て、十鉢ばかりずらりと並べた。――紅  
 を流したやうなのは、水打つた石疊に其の影が映つ  
 たのである。

が、待てよ。玄關口で、躑躅の鉢植に  
 吃驚するやうでは――此の柄だから通しはしま  
 いが――上壇の室で、金屏風で、牡丹と成ると、  
 目をまはずに相違ない。とすると、先祖へはともか  
 く、友達の顔にかゝはる と瞻を廊下に鍊  
 つて行くと、女中に案内されたのは、此は又心易い。  
 爪尖上りの廊下から、階子段を一度トン／＼と下り  
 て、ボタンと扉を開けて入つた。縁側づきのおつな

六疊。――床わきの袋戸棚に、すぐに箆笥を取  
着けて、衣桁が立つて、――さしむかひに成る  
やうに、長火鉢が横に、谿河の景色を見通しに据  
てある。

火がどツさり。炭が安い。有難い。平泉の晝食で  
も、昨夜松島のホテルでも然うだつた。が、火がど  
ツさり。炭が安い。有難い。鐵瓶の湯はたぎる。ま  
だお茶代も差上げないのに、相濟まない、清らかな  
菓子器の中は、ほこりのかゝらぬ蒸菓子であつた。  
「先づ一服」

流の音が、颯と座に入つて、カカカカカカと朗  
に河鹿が鳴く。

恰も切立の崖上で、縁の小庭に、飛石三つ四つ。  
躑躅――驚くな――山吹などを軽くあしら  
つた、此の角座敷。で、庭が尖つて、あとが座敷つゞ  
きに、むかうへすつと擴がつた工合が、友禪切の衤  
前と言ふ體がある。縁の角の柱に、縋りながら、恁  
う一つ氣取つて立つと、爪尖が、すぐに浴室の屋根

に届いて、透間は、巖も、草も、水の滴る眞暗な崖である。危つかしいが、また面白い。

内のか、外のか、重なり疊んだ棟がなぞへに、次第低に、溪流の岸に臨んで、通廊下が、屋根ながら、斜違かに緩く上り、又急に降りる。

湯の宿と、湯の宿で、川底の巖を抉つた形で、緑青に雪を覆輪した急流は、颯と白雲の空に浮いて、下屋づくりの廂に呑まれる。

「いゝ景色だ。あれが摺上川だね」

圓鬘の年増の女中が、

「あら、旦那よく御存じでございますこと」

「其のくらゐな事は學校で覺えたよ」

「感心、道理で落第も遊ばさないで」

「お手柔かに願ひます」

## 六

旅費が少いから、旦那は脇息とある處を、兄哥に成つて、猫板に頬杖つくつと、又嬉しいのは、摺上川を隔てた向う土手湯の原街道を、山の根について往來する人通りが、衣ものゝ色、姿容は、はつきりして、顔の朧氣な程度でよく見える。旅商人も行けば、蝙蝠傘張替直しも通る。洋装した坊ちゃんの手を曳いて、麥藁帽が山腹の草を縫つて上ると、白い洋傘の婦人が續く。

浴室の窓からも此が見えて、薄りと湯氣を透すと、ほかの土地には餘りあるまい、海市に對する、山谷の蜃氣樓と言つた風情がある。

温泉は、やがて一浴した。純白な石を疊んで、色紙形に大きく湛へて、幽かに青味を帯びたのが、入ると、颯と吹溢れて玉を散らして潔い。清々しいのは、かけ湯の樋の口をちら／＼と、こぼれ出て、山の香の芬と薰る、檜、槇など新緑の木の芽である。松葉もすら／＼と交つて、浴槽に浮いて、潜つて、湯の

揺るゝがまゝに舞ふ。腕へ来る、乳へ来る。拂へば  
馳つて、又スツと寄る。あゝ、女の雪の二の腕だと、  
松葉が命の鯨をしよう、指には青い玉と成らう。私  
は酒を思つて、たゞ杉の葉の刺青した。

此の心持で晩景一酌。

向うの山に灯が見えて、暮れせまる谿河に、なきし  
きる河鹿の聲。――一匹らしいが、山を貫き、  
屋を衝いて、笥に響くばかりである。嘗て、卯の花  
の瀬を流す時、箱根で思ふまゝ、此の聲を聞いた。  
が、趣が違ふ。彼處のは、横に靡いて婉轉として流  
を操り、此處のは、縦に通つて唳唳として瀧を調ぶ  
る。

すばい／＼、すばい／＼と、寂しく然も高らかに、  
向う斜に遙ながら、望めば眉にせまる、満山は靄に  
して、其處ばかり樹立の房りと黒髪を亂せる如き、  
湯の原あたり山の端に、すばい／＼、すばい／＼と  
唯一羽鳥が鳴いた。――世の中のうるたへもの  
は、佛法僧、慈悲心鳥とも言ふであらう。松の尾の

峰、黒髪山は、われ知らず、この飯坂に何の鳥ぞ。

「すばい鳥ですよ」

と女中は言った。

星が見えつゝ、聲が白い。

いま、河鹿の流れに、たてがみを振向けながら、

柴積んだ馬が馬士とゝもに、ぽつと霞んで消えた

と思ふと、其のうしろから一つ提灯。  
鄙唄

を、いゝ聲で　ー

【完】